

C 福島県スパリゾートハワイアンズコース
藤井 百々 (2000・政策)

「忘れないでください。」今回福島で出会った人から口々に言われた言葉。つながりが感じられる間柄なら、こんな言葉は生まれない。それを託されたということはすなわち、私たちの「感情の風化」を感じ、危機感を感じておられるからに他ならない。「助けて」でも「来て」でもない、「忘れない」ことを願わせてしまっている。そのことに強い衝撃を受け、今回参加する前に「今更被災地に行ってもなあ…」と感じていた自分を恥ずかしく思った。

福島では、想像以上に深い被災地の傷跡に改めて驚くと共に、被害の大小ややり直すための体力／気力、そして放射能の影響など、多くの問題が複雑に絡み合い、一筋縄ではいかない復興のあり方を目の当たりにした。壊滅的な被害を受けた海岸付近で、奇跡的に残った住居。震災被害などなかったかのように感じられる賑やかな商業施設の玄関口にある、「今日の放射線量」を記した大きなハワイボード。美しい旅館での夕餉は美味しかったが、「魚は他県で獲れたもので…」と下を向く女中さん。問題が複雑だからこそ、息の長い支援が必要であることは明白。なのに忘れようとしていた私。「絶対に忘れません！」と強く言えなかった私。

今回の「東北応援ツアー」は、私にとって「つながり自覚ツアー」であったのかもしれない。被災地とのつながり、そして、校友会とのつながり。誰かとつながっていることや支えられていることを感じられれば人は力が出るのだと、被災地の方々が教えてくれた。私ができることは、まず、折に触れて今回の経験を周囲の人に話して・つなげていくこと。「忘れないで」なんて悲しい言葉、これ以上言わせてはいけない。

もう一つ、わかったことがある。生まれて初めて足を踏み入れた福島は、自然も食も観光資源も素晴らしく、おもてなしは心地よく、観光客としての私をやわらかく受け入れてくれた。もっとゆっくり居たいなあ、他の場所にも行きたいなあと心から思った。飛行機ならば大阪から約1時間ととても近い。そう、観光地としても福島は「忘れてはいけない」場所なのだ。